

ニューカマーに見る日本社会への同化と他者化に関する研究

——韓国系ニューカマー1.5世と2世の事例から——

立命館大学大学院 今里 基

1 目的

日本においてコリアンは来日時期に合わせて日本の植民地時代に朝鮮半島から日本に渡った者にルーツを持つ者（オールドカマー）の子孫と、概ね1965年の日韓国交正常化以降に来日した韓国系ニューカマー及びその子孫に区分される。前者は戦前から今に至るまで日本政府の政策やマジョリティによる偏見などにより、日本への同化を一貫して迫られ続けてきた。一方、後者は1990年前後から急増し始めたオールドカマーと血統的には同じコリアンであるが、流入時期や来日理由の違いなどから、マジョリティに対する考え方が異なる（朴正義 2014）。近年、日本政府や日本社会は多文化共生を謳い、マイノリティの包摂を目指しているが、外国人に対する文化や言語面での同化を強いる傾向は根強い。本報告では、ニューカマーの本格的な移住から四半世紀が経過し、青年期を迎えた韓国系ニューカマーへのインタビューから日本での経験や生活の状況を明らかにし、日本政府や日本社会がマイノリティ、特にオールドカマーに求めてきた同化圧力は同じ血統である韓国系ニューカマーにも生じており、結果として他者化が生み出されていることを論じる。

2 方法

今回の報告では韓国系ニューカマーの1.5世と2世の若者（インタビュー時点で大学生、共に女性）の各1名のインタビューから分析を行う。報告者は2015年から継続的に日韓ダブルを含めた韓国にルーツを持つ若者に対してインタビューを行っており、今回の対象者はその中の各1人である。なお両者とも複数回のインタビューを行っている。使用言語は全て日本語で実施した。

3 考察と結論

語りを通じて、彼女たちはオールドカマーと同様に自分たちがマジョリティとは異なる存在であるという意識を持っていることが示された。その一方で、彼女たちには、オールドカマーを扱った先行研究で指摘されてきた「韓国人である」ことへの「こだわり」は見られず、将来の国籍に対する意向などに関しても柔軟な意見を持っていた。今回の二人の語りにおける共通点は、「表立った差別」を受けたことがないと主張した点であった。岸政彦（2014）は本土復帰前の沖縄から本土への若者の移動を事例に、本土へのあこがれを抱いて本土で就職し、露骨な差別を受けなかったにもかかわらず、沖縄に帰郷した者が多かった背景を明らかにするなかで、彼らがマジョリティへの同化を志向した結果として他者である自身を意識する、すなわち同化を目指すことが逆説的に他者化を志向することになることを論じた。見かけ上はオールドカマーと同様にマジョリティと変わらず、さらに「韓国人である」ことへの「こだわり」がない彼女たちは一見スムーズに日本社会に同化している、あるいは「日本人と同じになる」ことが可能であるかのように語る。そのような「名前を聞かれない限り気づかれない」と語り、日本人の通名を自在に使いわける彼女たちは、「同化」への志向それ自体が自らの他者性、マジョリティとの異なりを意識させ続ける契機となっている。

文献

岸政彦, 2014, 『同化と他者化 戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版.

朴正義, 2014, 『大久保コリアンタウンの人たち』国書刊行会.